

## 5. 体カテストと質問紙調査の関連(2～6年生)

本章では2章および3章で示した質問紙調査の結果と、4章の体カテストの結果との関連を分析する。体カテストの結果を総合評価のC以上とD以下(4章1節3項参照)に分け、質問紙調査の項目とのクロス集計を行う。

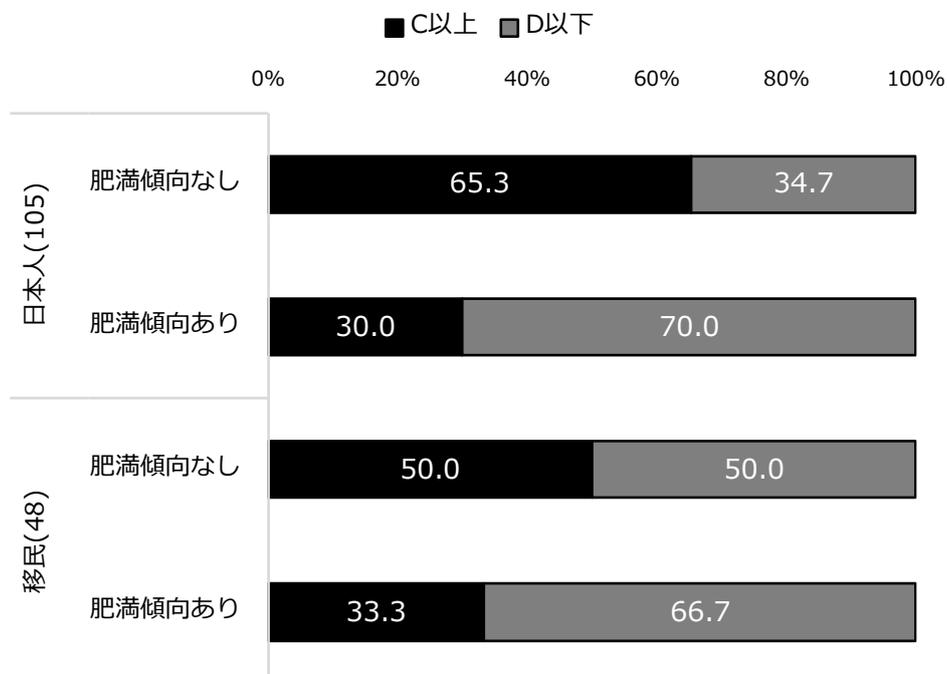
体カテストに関しては、スポーツ庁の報告書をはじめ多くの先行研究において、体格や運動・スポーツの実施時間、意識などとの関連が示されており、本章では移民の児童においても同様の傾向がみられるかを検証したい。なお、サンプル数が限られるため、本調査における傾向を把握することとまるものであり、その点を踏まえて参照されたい。

### 5.1 肥満度と体カテストの関連

図表 5-1 では肥満度と体カテストとの結果を、日本人・移民に分けて示している。肥満度に関してはローレル指数に基づくカテゴリー(4章2節2項参照)を用いるが、サンプル数を考慮し「やせ」「やせ気味」「ふつう」を「肥満傾向なし」、「肥満気味」「肥満」を「肥満傾向あり」として、肥満傾向の有無による分析を行っている。

体カテストの総合得点が「C以上」であった割合をみると、日本人では肥満傾向なし 65.3% > 肥満傾向あり 30.0%(以下同)、移民では 50.0% > 33.3%となり、いずれも肥満傾向のない児童のほうが体カテストの総合得点は良好である傾向がみられた。

図表 5-1 肥満度と体カテストの関連

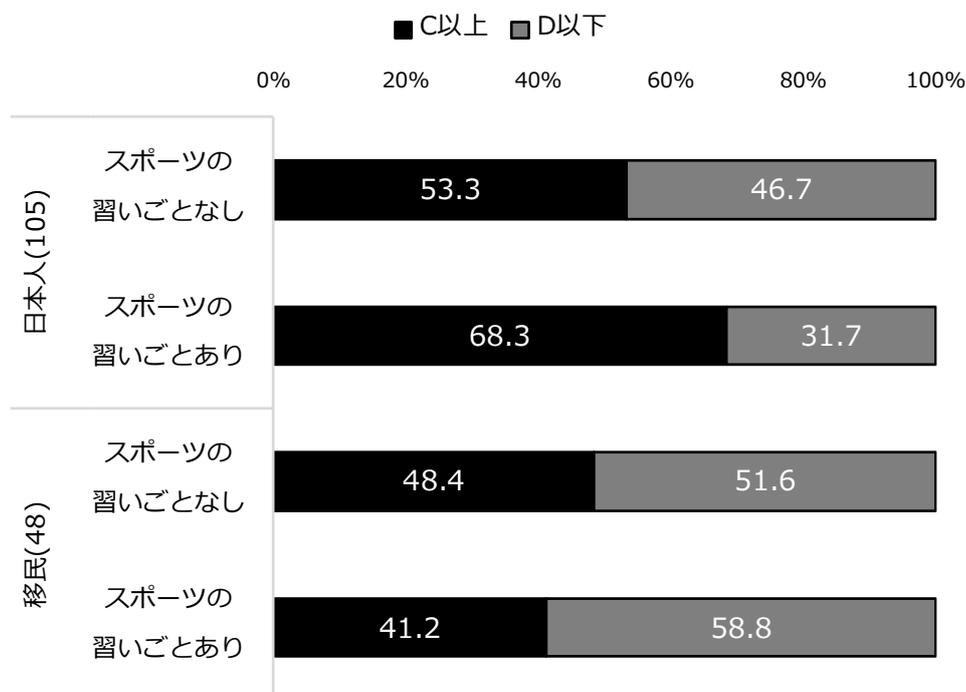


## 5.2 スポーツの習いごとの有無と体カテストの関連

図表 5-2 ではスポーツの習いごとの有無と体カテストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。習いごとの有無に関しては、2 章 4 節における「運動・スポーツの習いごと」に該当する項目を 1 つでも選択しているケースを「スポーツの習いごとあり」、1 つも選択していないケースを「スポーツの習いごとなし」と分類している。

体カテストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人ではスポーツの習いごとなし 53.3% < スポーツの習いごとあり 68.3% (以下同) で、スポーツの習いごとをしている群で若干高かった。一方、移民では 48.4% > 41.2% となり、スポーツの習いごとの有無と体カテストとの明確な関連はみられなかった。図表は割愛するが、日本人では高学年のほうに習いごとの有無による体カテストの差が顕著になるのに対して、移民ではそのような傾向がみられなかった。背景として、スポーツの習いごとと家庭の社会経済的背景 (Socio-Economic Status, SES) との関連が日本人と移民とで異なる可能性があるほか、体力には出身国や地域での運動経験なども複雑に関与していると推察される。

図表 5-2 スポーツの習いごとの有無と体カテストの関連

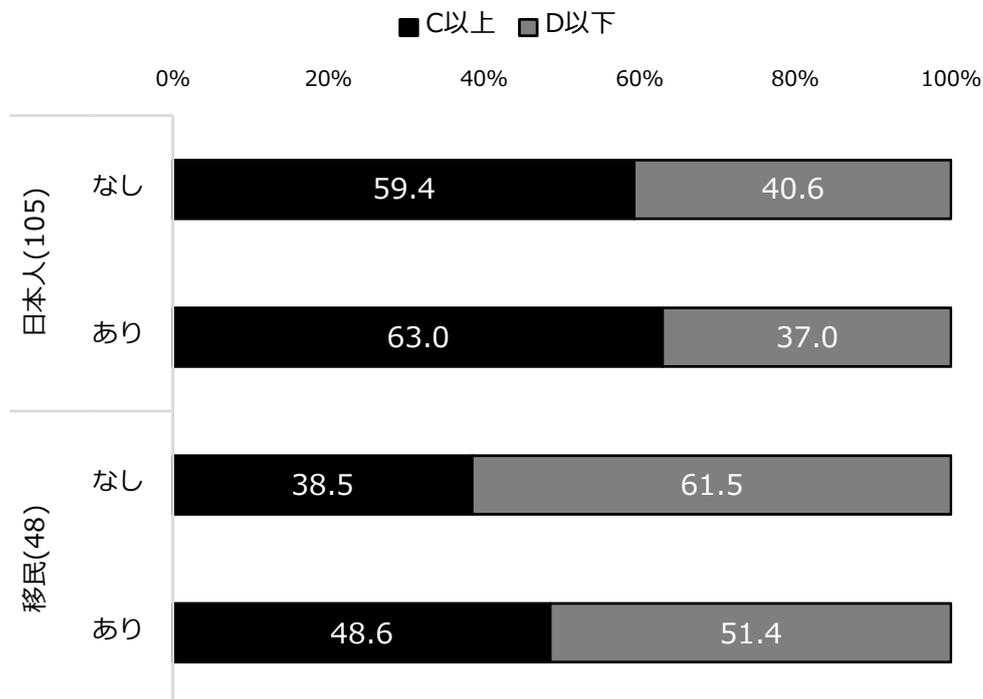


### 5.3 学校以外でのスポーツ・運動遊びの有無と体カテストの関連

図表 5-3 では学校以外でのスポーツや運動遊びの有無と体カテストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。学校以外でのスポーツや運動遊びの有無に関しては、2 章 8 節の図表 2-8-5 で使用した分類を用いている。

体カテストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人では学校以外でのスポーツや運動遊びなし 59.4%、あり 63.0%(以下同)であった。一方、移民ではなし 38.5%<あり 48.6%となり、10 ポイント程度の差がみられた。本項では実施の有無のみで分析しており、その内容や強度などの詳細な調査が今後求められる。

図表 5-3 学校以外でのスポーツ・運動遊びの有無と体カテストの関連

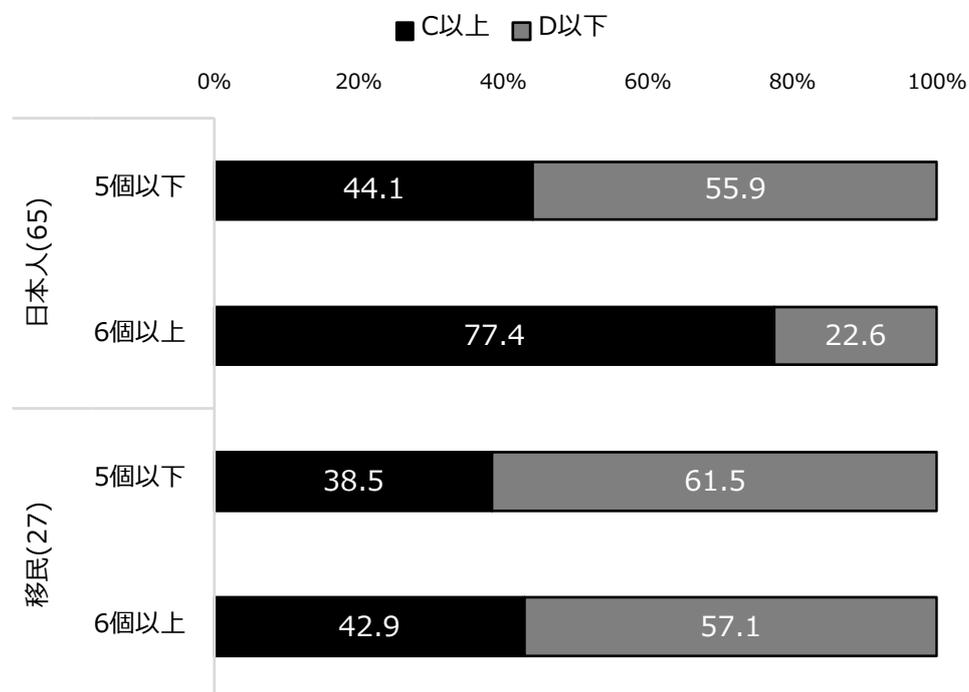


#### 5.4 好きな単元と体力テストの関連

図表 5-4 では体育の授業で好きな単元と体力テストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。好きな単元に関しては、2 章 2 節で説明した質問項目について、「好き」を選んだ個数が 5 個以下か 6 個以上かで区分して分析に用いている。

体力テストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人では好きな単元が 5 個以下 44.1% < 6 個以上 77.4% (以下同) と顕著な差が確認された。一方、移民ではそれぞれ 38.5%、42.9% と、差はみられなかった。日本人では体育における好き嫌い と 体力 と の 関 連 が あ る の に 対 し て、移 民 で は 両 者 の 関 連 が 小 さ い 可 能 性 が 指 摘 さ れ る。2 章 2 節 で 述 べ た よ う に、移 民 の 場 合、個 々 の 運 動 に 対 す る 得 手 不 得 手 や 技 能 の 高 さ よ り も、日 本 で は じ め て 触 れ る ス ポ ー ツ へ の 新 鮮 さ や、馴 染 み の 薄 い 活 動 へ の 戸 惑 い が 好 き 嫌 い に 影 響 し て い る と 考 え ら れ、そ の た め 体 力 と の 関 連 が み ら れ な い も の と 推 察 さ れ る。

図表 5-4 好きな単元と体力テストの関連



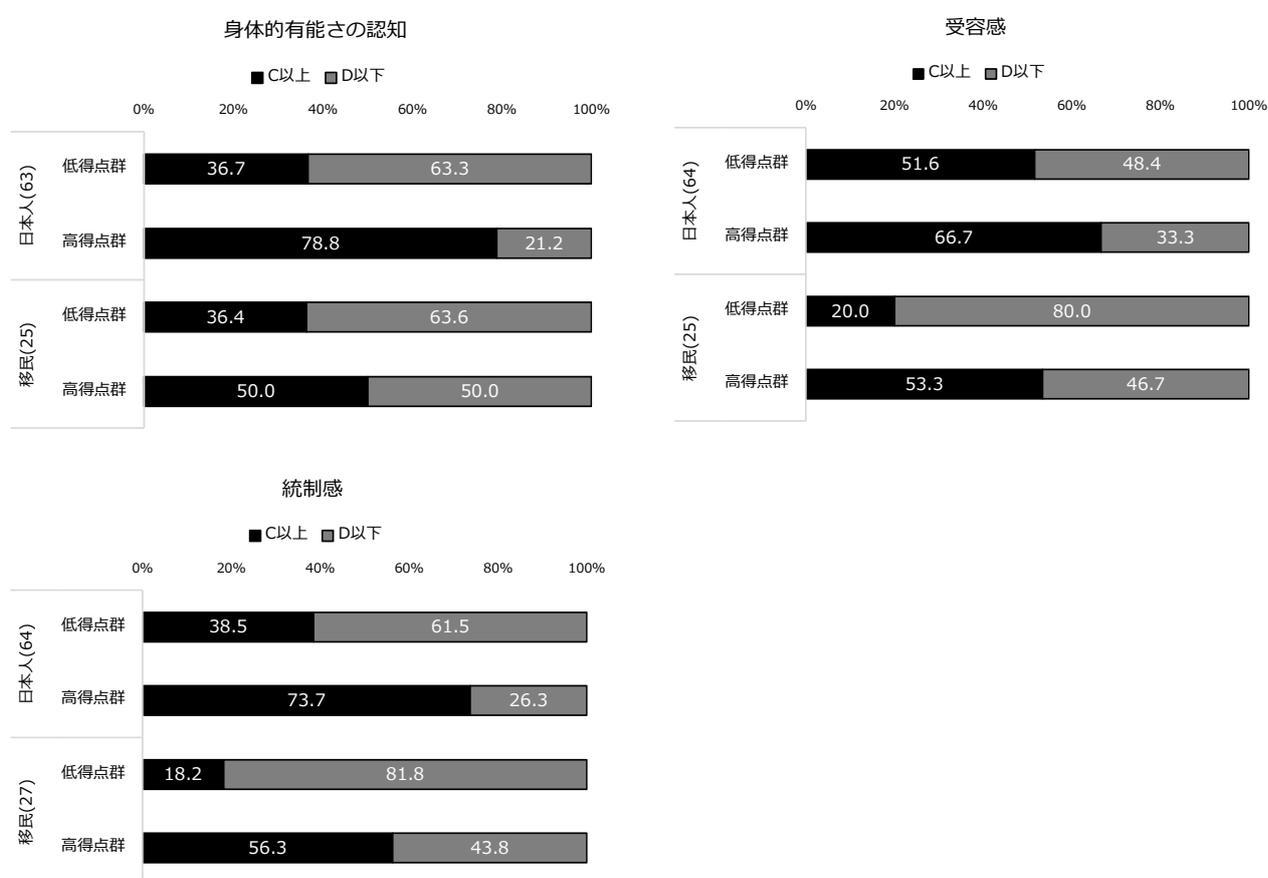
## 5.5 運動有能感と体カテストの関連

図表 5-5 では運動有能感と体カテストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。運動有能感に関しては 4 年生以上を対象とし、2 章 10 節で説明した質問項目に基づき「身体的有能さの認知」「受容感」「統制感」の各カテゴリーの回答を得点化した。7 点以下を低得点群、8 点以上を高得点群として二分し、分析に用いている。

体カテストの総合得点が「C 以上」であった割合に着目すると、まず日本人では「身体的有能さの認知」の得点群別には低得点群 36.7% < 高得点群 78.8%(以下同)、「統制感」では 38.5% < 73.7%と、40 ポイント前後の大きな差がみられた。「受容感」でも同様に高得点群のほうが C 以上の割合が高いものの、51.6% < 66.7%と、ほかのカテゴリーに比べると差は小さかった。

移民でも「身体的有能さの認知」36.4% < 50.0%、「受容感」20.0% < 53.3%、「統制感」18.2% < 56.3%といずれも高得点群のほうが体カテスト「C 以上」の割合は高い結果となったが、日本人と比べると「受容感」の得点群別の差が大きい点が特徴といえる。2 章 10 節を振り返ると、移民のほうが受容感は低く、特に先生からの励ましを受ける機会は少ない傾向がみられた。体カテストの結果が低い移民の児童は、体格や運動経験の問題に加え、言語の課題もありテストのルールや意義を十分に理解できていない可能性がある。そのような子どもたちがほめられる経験を十分に積めていない点は、移民の運動・スポーツを考える上で重要な課題といえる。

図表 5-5 運動有能感と体カテストの関連

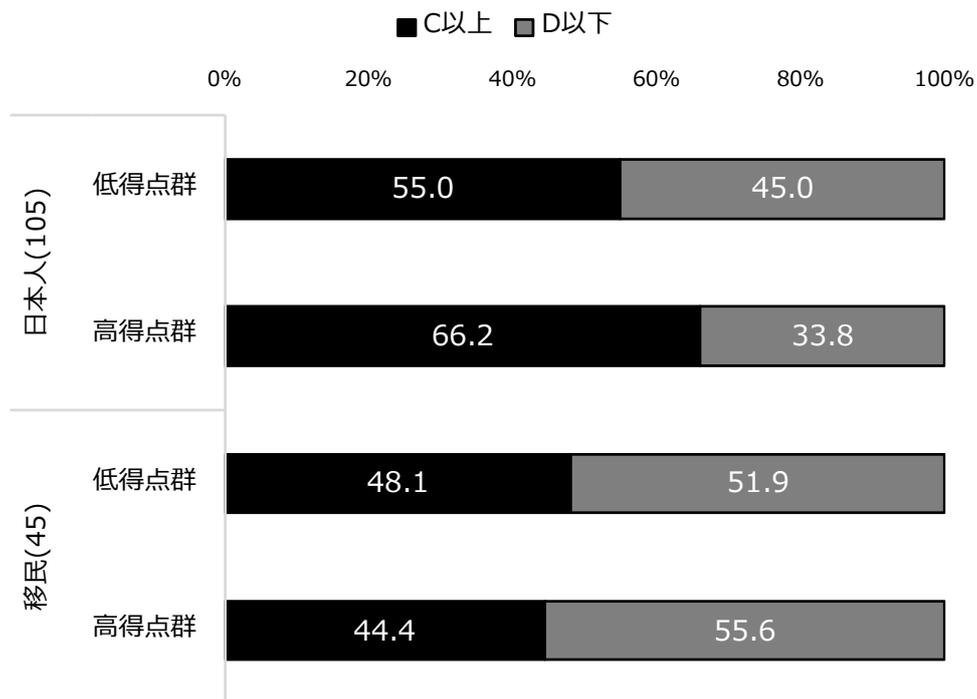


## 5.6 子どもの運動能力の認知と体力テストの関連

図表 5-6 では保護者による子どもの運動能力の認知の度合いと体力テストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。子どもの運動能力の認知の度合いに関しては、3 章 6 節で説明した 4 つの質問項目の回答を得点化し、10 点以下を低得点群、11 点以上を高得点群と二分して分析に用いている。

体力テストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人では低得点群 55.0% < 高得点群 66.2% (以下同) と、高得点群のほうが 11.2 ポイント高かった。一方、移民ではそれぞれ 48.1%、44.4% と、顕著な差はみられなかった。

図表 5-6 子どもの運動能力の認知と体力テストの関連

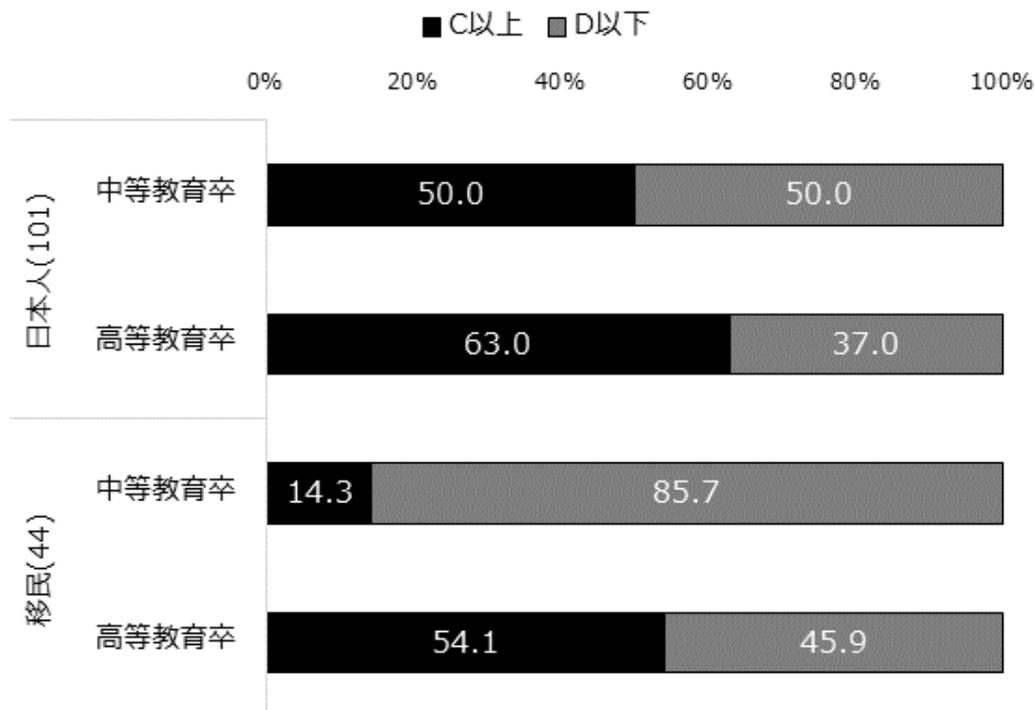


## 5.7 母親の学歴と体カテストの関連

図表 5-7 では母親の学歴と体カテストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。保護者の学歴は、家庭の SES を示す指標のひとつとして、学術研究において頻繁に用いられている。本項で扱う母親の学歴については、最終学歴として回答された学校のうち「中学校」「高等学校」に該当する場合を「中等教育卒」、「専門学校・各種学校」「高専・短期大学」「大学・大学院」に相当する学校段階を「高等教育卒」と分類した。

体カテストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人では中等教育卒 50.0%<高等教育卒 63.0%(以下同)と高等教育卒の割合が高く、移民では 14.3%<54.1%とさらに顕著な差がみられた。ただし、中等教育卒は本データの約 2 割にとどまりサンプル数が限られるため、結果に関しては慎重な解釈が求められる。子どもの体力格差に注目が集まり、複数の先行研究で SES との関連性が指摘されているが、特に移民の中でも社会経済的に不利な立場にある子どもたちの状況については、今後も継続的な検討が必要である。

図表 5-7 母親の学歴と体カテストの関連



#### コラム④ 運動会

A 小学校では毎年運動会が行われ、多くの保護者や地域の方が参観に訪れる。来賓席などの観覧席の案内には、日本語に加えて英語や中国語の表記もみられる。それ以外では、ところどころで外国語の会話が聞こえる程度で、全体的にはほかの小学校と大きく変わらない光景である。リレーメンバーを紹介する放送では、外国につながる児童と思われる名前も多く読み上げられ、子どもたちは軽快に走り抜けていく。4章1節で示した通り、移民児童の50m走の平均値は日本人に比べて有意に低いものの、これはあくまで平均値の比較であり、移民の中にも優れた記録をもつ児童がいる。

一方で、児童は運動会より前の体育で、短距離走やかけっこなどの陸上運動系の単元を経験しているが、「まずトラックで自分のコースをまっすぐ走らせることに苦労する」という教員の声も聞かれる。短距離走のように比較的シンプルなルールであっても、馴染みのない児童がいて、徐々に適応している。運動会当日も、徒競走で自分のコースやスタート位置を十分に把握していないと思われる移民児童がみられ、その場で教員が個別に声掛けをして対応していた。どの児童も懸命にゴールを目指して走る姿には、子どもの属性や順位にかかわらず、保護者や地域の方から終始あたたかい声援が送られていた。